彼女は立派な働きを求めている

ジム・ライハー（Jim Reiher)、メルボルン ・ ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf ・ 2021年4月 ・ 2026年10月改訂

テモテへの手紙第一3章1節

> このことばは確かです。もしだれかが監督の務めを求めるなら、その人は立派な働きを望んでいるのです。(Elberfelder CSV〔ドイツ語聖書翻訳〕)
>
> こう言われています――そしてこれは真実のことばです――。「もしだれかが教会の指導的な職務に就こうと努めるなら、その人は大きく名誉ある務めを目指しているのです。」(Neue Genfer Übersetzung〔ドイツ語聖書翻訳〕)
>
> このことばは信頼できます。もしだれかが監督の職を志すなら、その人は立派な務めを望んでいるのです。(Zürcher Bibel〔ドイツ語聖書翻訳〕)

聖書の章の区分がどのようにして生まれたのか、考えたことがおありでしょうか。章の区分は原典にはありませんでした。それが加えられたのは、ようやく13世紀になってからのことです。章の区分が本文の一部になると、それは私たちが聖書を読み、解釈する仕方を変えることにつながりました。何しろ私たちは、しばしば章ごとに、あるいは章に沿って聖書を学びます。章の初めから読み始め、章の終わりで読むのをやめるのです。どこで新しい章が始まるかについての決定のいくつかは、かなり奇妙なもの、それどころか間違ったものであることが明らかになっています。たとえばコロサイ人への手紙4章1節は、本来はまだ3章に属しているはずでした。ほかにも考えられる誤りは、それほど明白ではありませんが、注意を払うべきものです。

教会の長老：テモテへの手紙第一3章1節という特別なケース

多くの人は、3章1節をまず第一に、長老と執事についての長い議論を含む3章の残りの部分の論理的な始まりと見ています。しかし私は、この節は実は3章の導入というよりも、むしろ2章の締めくくりであると考えます。これは教会における女性にとって重要な意味を持ちます。なぜなら、そうだとすれば1節は、男性にも女性にも長老／監督になるよう励ましていることになるからです。**この節が2章を締めくくるものだとすれば、パウロが、信仰において訓練され成熟している限り、両方の性が指導的な役割において神に仕えることを支持していることがわかります。確かにパウロは、エペソの教会の女性たちに一時的にいくつかの制限を課しました。しかし彼は、それが自分の本来の目的だと見なされることを望んではいません。むしろ彼は、ごく一般的に、男性も女性も長老になることを目指すのは良いことだ、と付け加えているのです。**

2章における未熟な指導者の問題

私がなぜこのように提案するのかを理解するためには、3章1節の直前にあるもの、すなわち2章8-15節をも考慮に入れなければなりません。まさにこの議論の多い箇所が、教会における女性の奉仕と指導を抑えつけるためにしばしば用いられています。2章8-15節は伝統的に、女性を教会の指

導と奉仕から締め出すように解釈されてきました。しかしそれは誤った解釈です。**少なくとも、この箇所を理解するには、同じように妥当な（いや、さらに優れた）別の方法があると言うことはできます。** これらの解釈の主な違いは、この箇所を、あらゆる時代の、世界のあらゆる文化と国のすべてのキリスト者に対する一種の普遍的な命令と見るのか、それとも、紀元一世紀後半のエペソにおける当時の問題を扱ったものと見るのか、という点にあります。言い換えれば、それは「神を愛し、隣人を愛しなさい」のようなものなのでしょうか。それともむしろ「あなたがたの奴隷を良く扱いなさい――そして奴隷たちよ、主人のために懸命に働きなさい」（6:1-2参照）のようなものなのでしょうか。

テモテへの手紙第一2章8-15節で問題になっているのは、教会の中の特定の裕福な女性たち――おそらくエペソ社会から新たに回心した女性たち――で、彼女たちは、きちんと教えを受けたり新しい信仰において成熟したりする前に、教会の指導者になろうとしていたのです。[1] 彼女たちは、教えることができ、教会の中で権威を持つ長老になろうとしていました（2:12）。パウロはきわめて明確にしています。彼は女性たちがきちんと教育を受けることを望んでいるのです（2:11）。**興味深いことに、この節にはこの箇所で唯一の命令形が含まれています。「彼女は学びなさい」です。つまり、11節はパウロの命令に最も近いものであり、彼は女性たちが教えを受けることを強く求めているのです。** これは彼の思考と著述における一つの頂点です。**実のところ、これこそがこの段落を解く鍵です。パウロは、教会のすべての成員が信仰においてきちんと教えを受けることを望んでいます。男性だけでなく、男性も女性もです。彼らがきちんと訓練され、成熟したなら、教える立場や指導する立場は、女性にも男性にも同じように開かれることになるのです。**

パウロがこの箇所（テモテへの手紙第一2章8-15節）で、特に女性に語りかけるために二度用いているもう一つの語は、9節と15節でしばしば「慎み深さ／礼儀正しさ」（Sittsamkeit/Anstand）[2] と訳されている語です（私に言わせれば誤訳です。Elberfelder CSVは脚注で「または思慮深さ、または健全な思い」と記しています）。この語は本来、「頭がはっきりしていること、思考において成熟し理性的であること、考えが混乱していないこと」を意味します。時には他の道徳的な資質と結びつくこともありますが、この語に特定の道徳的資質だけを意味させてしまうなら、その本質的な意味を奪うことになるでしょう。パウロは、教会の女性たちが、教会で指導的な立場に就く前に、明晰に考え、分別をわきまえた者となることを望んでいるのです（9節では慎ましさと服装の選び方に関して、15節では信仰において成熟し、信仰にとどまることに関して）。

もしテモテへの手紙第一3章1節がこれらの女性たちに向けられていたとしたら？

そこで3章1節に来ます。そこには正確には何と書かれているでしょうか。さて、少なくとも一つのことは書かれていません。「男性だけが長老になることを求めるのは良いことだ」とは書かれていないのです。そうではありません。この節は男性だけを指しているのかもしれません。しかし同じように、女性だけを指しているのかもしれません。**あるいは――その可能性が非常に高いのですが――男性と女性の両方を指しているのです。** NIV（New International Version）はここをより良く訳しています。「ここに信頼できることばがあります。『監督になることを志す者は、高貴な務

めを望んでいるのです。』」（**「Wenn jemand …（もしだれかが……）」とするドイツ語訳も同様です。「jemand（だれか）」は男性も女性も意味しうるのです。**）

いくつかの翻訳は、3章2-14節（男性の長老、男性の執事、女性執事または執事の妻たち、男性の執事）を理由に、3章1節に英語の「man（男）」という語を挿入しました。**この選択のために、多くのキリスト者は、女性執事を支持する議論はありうるとしても、女性長老の余地はないという結論に達してしまいました。** これは一見もっともらしく思えるかもしれませんが、欠陥のある議論です。1節では、「男たち」や「男」を表すギリシア語は用いられていません。「彼」を表す独立した語も用いられていません。しかし、ギリシア語の **tis**（「だれか」）という語は用いられています。これは男性にも女性にも同じように用いられる語です。同様に、「彼または彼女は望む」に当たる語は、「望む」という語の動詞語幹に「彼、彼女、またはそれ」を表す語尾がついたものです。この動詞がだれを指しているかは、文脈が決めなければなりません。

テモテへの手紙第一3章1節を2章8-15節の締めくくりとして位置づけるなら、この節は、教会における女性の指導を確認する強力な手がかりとなります。すでに述べたように、用いられている語は男性にも女性にも当てはまりうるので、3章1節は単にこう意味することもできます。「もしある女性が監督になりたいという願いを持つなら、それは彼女が望むにふさわしい良いことです。」**これはつまり、パウロが次のようなことを伝えている可能性があるということです。「女性は教えを受けるべきである、あるいは学ぶべきである、そして成熟し有能になるまでは教えたり権威を持ったりすることはできない、と私は強く主張したが、それにもかかわらず――女性が長老になりたいと願うなら、それは彼女にとって良いことだ。」**

3章の残りの部分における女性

続く3章2-7節は長老たちについてです。**パウロはその際、当時長老の大半を占めていた男性たちを念頭に置いています。**1節は前の本文の締めくくりであり、2節こそがパウロにとって本当に新しい思考を導入している、という私の推測は、ギリシア語の2節の冒頭の語「必要である」（または「ふさわしい」）によって裏づけられます。これは「それでは」「さて」「したがって」「それゆえ」と訳すことができます。もちろん2節は、思想的には先行する部分とつながっていますが、新しい方向に踏み出しています。パウロはちょうど、女性たちを奉仕のために訓練すること、そして彼女たちがきちんと訓練され信仰において成熟するまでは権威を行使させないことについて語り終え、教会の長老になりたいと願うのは悪い野心ではないということをすべての人に思い起こさせて締めくくります。それから一息置いて、その時点で関係のある別の主題に話を進めます。「よろしい……さて、今の長老たちについてですが……。」この次の箇所（3:2-7）は、教会の現在の長老たち、あるいは間もなく任命される長老たちについてのものです。

長老は「一人の妻の夫」であるべき、あるいは（ある人々が訳すように）「自分の妻に忠実」であるべきだという言い回しをうまく扱うことができるなら、3章2-7節を両方の性に当てはまるものと理解することは、確かに理にかなっています。パウロはここで、おそらく「性別の一般化」を用いているのです。当時、長老の大多数が男性であったとすれば、それは「あなたのただ一人の伴侶に忠実でありなさい」と言うための一つの言い方であった可能性があります。私は1990年

代、メルボルンのある聖書学校で教えていたころのことを思い出します。講師は一人を除いて全員が男性で、その一人の女性はパートタイムで働いていました。社交的な特別行事があるとき、全職員に送られる手紙に「そして奥さんを連れて来てください」と書かれているのが常でした。この言い回しによって除外されたのは、その一人の女性だけではありませんでした。唯一の独身の講師も、自分が無視されていると感じました。この種の性別の一般化を思い返すと、私は身震いします。それがどれほど居心地の悪いものであっても、それは私たちの講師が既婚男性だけであったことを意味してはいませんでした。そしてここでの表現（「一人の妻の夫」）についてもう一つ言えば、もしそのような解釈方法を厳密に当てはめるなら、「あなたの隣人の妻を欲してはならない」という戒めも男性にだけ当てはまり、女性には何も語っていないことになってしまいます。

テモテへの手紙第一2-3章を考え直す

ですから、テモテへの手紙第一2章8節-3章14節について私たちがよく目にする次のような区分ではなく、

- 教会における女性と男性（2:8-15）
- 男性の長老（3:1-7）
- 男性の執事（3:8-10）
- 女性執事（または執事の妻たち）（3:11）
- 再び男性の執事（3:12-14）

この手紙の思考の流れを次のように理解すべきです。

- 教会における女性と男性（2:8-3:1）
- 現在の状況：現在の指導者たちが性別の類型に沿って語りかけられている（3:2-7）
- 男性の執事（3:8-10）
- 女性執事（3:11）
- 男性の執事（3:12-14）

あなたが3章2-7節をどのように解釈するにせよ、この記事の重点は3章1節を際立たせることにありました。この節を2章8-15節の締めくくりと見るなら、それは女性たちにこう思い起こさせます。女性が長老になりたいと願うなら、それは良いことだ、と。**たとえあなたが別の意見をお持ちだとしても、この節は性別に中立です。男性であれ女性であれ、だれかが教会の指導を志すなら、それは良いことなのです！** たとえこの節を3章の初めに置いたままにするとしても、それは両方の性に当てはまります――そしてそうであれば、それに続く箇所全体も両方の性を含んでいるということを支持することになります。テモテへの手紙第一3章1節を、教会の指導的な務めを目指すようにとの男性と女性への招きと見ることは、使徒パウロの教えにおけるきわめて励ましに満ちた特徴です。

女性たちは、聖書のこの部分におけるパウロの教えの解釈によって、深く傷つけられてきました。しかし私は、この箇所についてのこの別の理解によって、この点でパウロと和解することができると提案したいと思います。彼は、ある人々が描き出してきたような男性優越主義者ではありませんでした。彼は、女性にも男性にも教会で奉仕させる用意のある人だったのです。

This article first appeared in the Spring 2021 issue of CBE International's Mutuality magazine (www.cbeinternational.org)

ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf（ジム・ライハーの厚意による許可を得て）、2021年4月20日

注

1. この箇所についての別の見方の詳しい説明については、Jim Reiher, Women: Leadership & the Church (Melbourne: Acorn Press, 2006), 85–93 を参照。また Judy L. Brown, Women Ministers According to Scripture (Kearney: Morris Publishing, 1996), 279–312 および Rebecca Merrill Groothuis, Good News for Women: A Biblical Picture of Gender Equality (Grand Rapids: Baker Books, 1997), 209–229 も参照。
2. ヴァルター・バウアー（Walter Bauer）は、この語の第一の、最も明白な意味として「分別、理性、精神の健全さ」を挙げています。第二の意味として「良い判断力、節度、自制」を挙げています。ゲアハルト・キッテル（Gerhard Kittel）も同様に説明しています。この副次的な意味が関わってくる場合にも、常に健全な思考が働いている、と。テモテへの手紙第一2章9節と15節で用いられている形は、新約聖書ではほかに一箇所、使徒の働き26章25節でしか用いられていません。そこではこの語は常に「明晰な思考」あるいは「理にかなった」と訳されています。William F. Arndt, F. Wilbur Gingrich, Frederick W. Danker, Walter Bauer および William Arndt, A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature. 2nd ed. (Chicago: University of Chicago Press, 1979), 802; G. W. Bromiley および Geoffrey William Bromiley, Theological Dictionary of the New Testament, ed. Gerhard Kittel および Gerhard Friedrich (Grand Rapids: Eerdmans, 1964), 1097-1104 を参照。